



(上) 青森工業高校自動車部には25年9月現在、16人が所属。機械科、電子科、建築科と学校でのコースは異なるが、当然、大のクルマ好きが集まっている。前回のもてぎと今回のSUGOは同じ参加メンバーに。自動車部の活動に理解のある地元企業のサポートも部の活性化につながっているという。(右上) Formula Beatのマシンではなかったが、併催レースに出場したマシンでエンジンの暖機の手順もプロのメカから教わっていた。役得？(右下) ラップタイム計測やサインボード掲出などは基本中の基本。暑さの厳しいコンディションだったが、しっかりとこなしていた。

VOICES 参加した生徒たちの声



機械科3年 野村侑来 さん

メカさんが何でもできることに驚きます

「今回は基本的な作業や給油作業などを担当させていただきました(危険物取扱者乙種4種免許取得済み)。メカさんがかなり細かいところまで目を配りつつ、ひとりで何でもできてしまうので、すごいなと思いました(笑)」
／好きなクルマ：ニッサン・ローレル(C33)



電子科2年 大井大晴 さん

空気圧調整→運搬が大変でした(笑)

「タイヤ12本の空気圧調整をしたのですが、繊細さも必要で、それを終えてからピットに運ぶ作業が大変でした(笑)。トルクレンチの使い方を教えていただいたので、次に活かせると思います」
／好きなクルマ：ニッサン・ステージア オーテックVer 260RS



建築科2年 苗苗新大 さん

任せてもらえる量も増えたかも

「インパクトレンチでの脱着は初めてで、楽しかったです。3回目の参加で、自然と『これをやっておきます』と変わってきて、任せてもらえる量も増えたのかなと感じています」
／好きなクルマ：スバル・インプレッサWRX STI (GDB最終型=鷹目)



機械科2年 千田椰尋 さん

NATSの学生としてやってみたく

「3回目の参加でした。前々から一緒にやってみたくて思っていました。今回チームNATSさんの活動に参加させていただき、モータースポーツ科に進学してみたいなという気持ちがさらに強くなりました」
／好きなクルマ：トヨタ・セリカGT-FOUR(ST165)



「今回、僕のチームを手伝ってもらったのは大井くんです。とても助かりました。ずっとスムーズに動いてくれたと思います」(このSUGOを連勝した酒井翔太/ファーストガレージ)



F-Belはダンロップタイヤのワンメイクレースです。



質も全体的にレベルアップ。もちろんプロのメカニックから指導や確認を受けながらとなるが、専門的な領域にも一歩踏み込んだ作業にあたっては、レース現場で実際の作業に携わる体験学習・研修は徐々に行なわれるようになってきているが、F・Beのプログラムではチームや開催サーキットの協力のもと、主に安全面など状況が整えば、生徒たちの経験値なども考慮しながら、可能な範囲で深く踏み込んだ内容を目標していることが大きな特徴だ。このSUGOには、モータースポーツ科の学生たちがチームをオペレーションしているNATS(日本自動車

大学校)もエントリー。同科への進学を志望している自動車部員がチームNATSの作業に加わっていた。いわば、レース現場の体験キャンパスだが、そうした柔軟な運用ができるのもこのプログラムならではのだろう。先生のおひとりは「見守るだけで(笑)」と話していたが、2日間を終えた生徒たちから、技術面、精神面での成長をあらためて感じたようだ。「工具の使い方などをはじめ、大人の方々のレースをさまざまな角度から学び、体験することは、生徒たちにとってとてもいい経験になるだろうと考え、取り組みを続けてきました。今回は全

作業の量も質もレベルアップ 先生方も生徒たちの成長に手応え

員が2〜3回目の参加なので、同じチームさんなら、『前回はいくらもやっていたから、今回はここまでやってもらおう』という感じで、やれることやらせていただけることが増えてきているのかなと思います」(同高機械科 三上元也さん)

「前回(青森工業高校として4回目)のもてぎでは、参加は1回目ながらかなり多くの作業をしたという生徒もいたのですが、『今回も来たい』と。普段とは違うものに触れたり、違う世界の方々と接したりすることで視野が広がるでしょうし、将来の進路を考えるうえでも大きな材料になるのではない

かと考えています。自動車部ではエコランの大会にも毎年出ているのですが、時間の使い方などもF・Beでの経験が活きてくると期待しています」(同高2年学年主任 佐藤正広さん)

かつてこのプログラムに参加した青森工業高校自動車部メンバーのなかには自動車業界に進んだOBもいる一方で、プロの世界に触れてマインドをおおいに刺激されたに違いない。日本F4協会としても、もちろん自動車関連業界志望者に限らず、生徒たちの視野と選択肢を広げるためのひとつの場として、より多くの高校にF・Beを活用していただきたいとのことだ。



K.Takahashi

刺激は強めに。

青森工業高校自動車部がプロの世界をSUGOで体験



Formula Beat
2025 F-Be CHAMPIONSHIP

PADDOCK NEWS Vol.4

国内唯一開発競争のある
ミドルフォーミュラF-Beの魅力を探る

今

回はインパクトレンチでホイールの脱着作業を初めてやらせていただきましたが、ガガガッというスピードが新鮮でした。「タイヤの空気圧を狙った値にジャストで合うところまでやることに驚きました」

そうしたモータースポーツの世界の一端をピットでの実作業で体験したのは、青森県立青森工業高校自動車部の部員たち4人。7月19・20日にスポーツランドSUGOで開催されたFormula Beat(以下F・Be)第8戦・9戦(全日のダブルヘッダー)に各チームの手伝いとして参加し、レースオペレーションの一部を担った。

F・Beを運営する日本F4協会は、ステップアップを目指す若手ドライバーが修練するためのカテゴリーとして基盤を整えることのほか、車両規則を改造自由度の高いものとするなどでエンジンやメカニックの創造性と技術の向上を図るための環境整備にも注力。モノづくりを通じて将来の日本のモーター

タースポーツや自動車業界を支える人材の育成を理念に掲げている。その一環として2020年度から進めてきているのが「人材育成共同研究」活動だ。これは、日本F4協会がテーマやプログラム例などを全国の高校に提案、職業体験授業・研修としてF・Beの現場を活用してもらうというもので、提携校は現在では3校に。青森工業高校は部活の自動車部として23年から参加。このSUGOで5回目となった。

今回のメンバーは全員が参加2〜3回目。タイムスケジュールと実際の進行に合わせて済ませておく、あるいは取りかかるひとりの作業についてはこれまでに学んでおり、マシンやホイールのクリーンアップ、タイヤの運搬といった基本的な作業は初日からスムーズにこなしていた。また、自動車部ということでチームからの「デフォルト」の期待も高く、一部メンバーは4本×3セット計12本のタイヤの空気圧調整を任せられるなど、作業の量や



教員の佐藤さん(左)と三上さん(右)。自動車部は11月9日の「2025 Ene-1 MOTEGI GP」にも出場予定。充電式単3乾電池40本を動力源に、より長い距離をより短い時間で走ることを競う。車両は生徒たちが自作。